

2015年度 SNE学会 ラウンドテーブル

ひらがな習得と 音韻意識の発達過程

NPO法人滋賀大キッズカレッジ
金沢大学大学院博士課程
深川 美也子

滋賀大キッズカレッジの アセスメント

知能検査and/or認知検査
SKC作成の漢字の読み書き検査
ひらがな読み書き検査
音韻検査
描画・形態構成能力検査(ROCF)
図形模写
アルファベット・英語検査
生育歴・学校などの学習環境の聞き取りなど

読み書きの習得に先立って重要な
音韻意識の発達
自生的に発達する

- 話しことば
音の連なりである「語」
音韻的構成要素に分節化

↓

各々の語音を同定し、音の配列順序を把握・・・
音韻操作

音韻意識

ことば(単語)の意味的側面ではなく、
音韻的な側面に注目し、
ことばの音韻構造を把握して、
音韻的な要素を同定し、
個々の音韻的要素を操作する能力

「音-文字対応規則」(G-P規則)とは別のもの

先行研究: **音韻意識の発達**

音韻分解
4歳半・・・語の音節数に関係なく基本音節の単語を正しく音節に分けることが可能

音韻抽出
4歳後半・・・口頭で語の各位置の音分析・抽出ができる (天野:1987)

- 読字数が6-25の範囲になると、語頭音抽出正反応率が90%をこえ、この語頭音抽出ができることがかな習得の前提条件である(天野:1985)

□原恵子「健常児における音韻意識の発達」(2001)
* 60%以上の正答率を示した被験児の各年齢群における割合

抹消(音削除)

- 年中児・・・通過率 2拍約30%、3拍約20%
- 年長児・・・通過率 2拍 80%、4拍 50%、5拍 40%
- 小学1年・・・通過率 5拍 80%
- 小学2年・・・通過率 6拍 80%、5拍以下 90%以上

逆唱

- 年中児・・・通過率 2拍 30%未満、3拍以上 0%
- 年長児・・・通過率 2拍 80%、3拍 50%台、4拍20%未満
- 小学1年・・・通過率 3拍 80%、4拍 60%
- 小学2年・・・通過率 4拍約90%

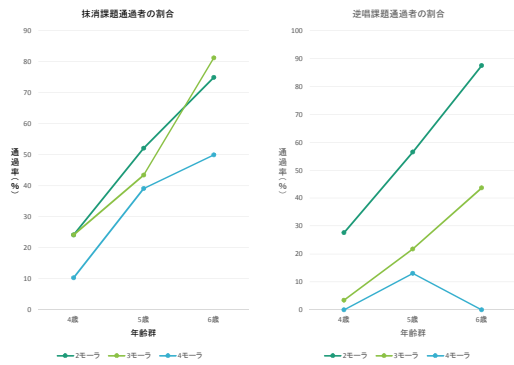
『就学前幼児の音韻と
ひらがなの読み書き(2015深川)』

- 対象

	4歳児	5歳児	6歳児
男	18	12	6
女	11	11	10
計	29	23	16

- 検査内容
音韻意識検査
(抽出、抹消、逆唱各2~4モーラ数単語)
ひらがな一文字よみ、単語読み
ひらがな単語書き

音韻意識検査(抹消課題・逆唱課題)の結果



ひらがな読みの発達

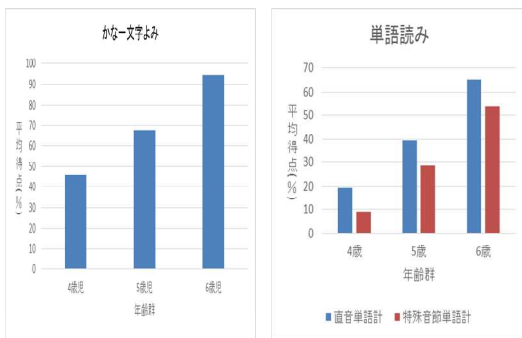
◆文字の読みの習得は、一様なテンポですすむのではなく、初期の20~25文字の学習の後、その後一気に増加してU字型やJ字型を示す

(国立国語研究所:1972、天野:1987)

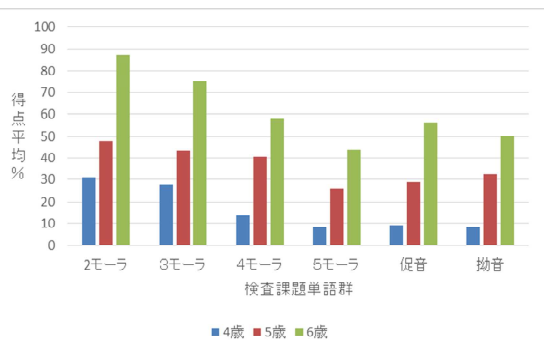
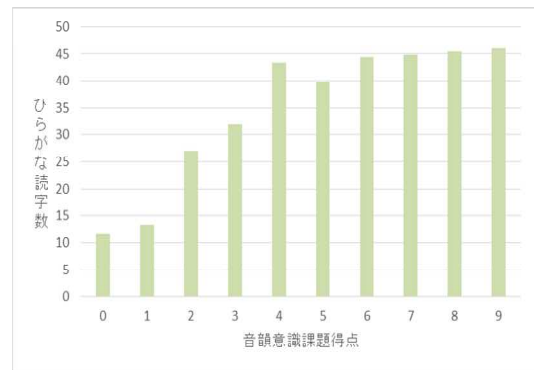
◆幼児の読み調査調査では、清音・撥音46文字の範囲では5歳児の平均読字数は43.8文字(95.2%)になった

(島村・三神:1994)

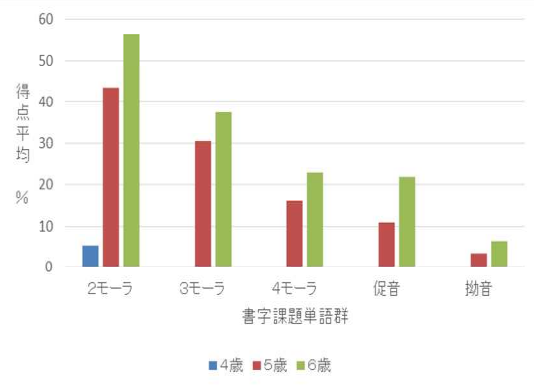
ひらがな一文字よみ、単語読み結果



音韻得点別平均読字数



単語読み検査結果



単語書き課題 結果

読み書き困難のある子どもたちの音韻意識
キッズカレッジのケースから

- 最近の教育相談の傾向から
低年齢化・・・就学前から相談も
高学年(中学生以上から)・・・

就学前児～中学生:22例(平均年齢9:03)

表1 検査対象児年齢別人数

年齢(歳)	5	6	7	8	9	10	11	12	13
人数(人)	1	4	4	6	1	3	1	1	1

音韻意識検査結果から

・分解課題

低学年児では2モーラ単語の分解が十分ではないケースもある

4モーラ単語から困難度が大きくなる
(手立てとして指を使って考える中1生)

・抽出課題

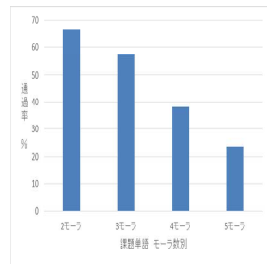
2音節で3人、4音節6人、5音節10人が不可

音韻意識検査結果から
原2001の健常児結果との比較

□音削除課題(抹消課題)の**通過率80%以上**

通過率・・・課題において60%以上の正答率を示した被験児の各年齢群における割合

- ・年長 2拍
- ・小1 ～5拍



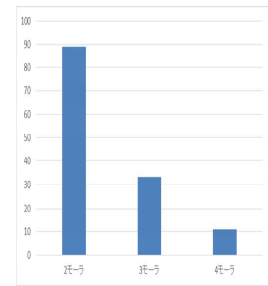
キッズ児 抹消課題 通過率

音韻意識検査結果から
原2001との健常児結果との比較

□逆唱課題の**通過率80%以上**

通過率・・・課題において60%以上の正答率を示した被験児の各年齢群における割合

- ・年長 2拍
- ・小1 3拍
- ・小2 4拍



キッズ児 逆唱課題 通過率

音韻意識検査結果(分解、抽出、抹消、逆唱課題)



音韻意識とひらがな読み書きの関係
音韻意識の発達に弱さがあると・・・

読み

- ・つぶ読み
- ・特殊音節の読み、特に拗音表記で困難さが大きい
きや(kya)は、き(ki)とや(ya)を早く言ったからといって「きや(kya)にはならない
- ・かな漢字混合文では、ひらがなが続くところで、つまる

書き

- ・特殊音節表記でエラーが起きやすい
- ・「漢字の方が簡単や! 「か」のほうがずっとむずかしい・・・」(1年生男子)
- ・漢字では2年生漢字の正答率が30%未満で停滞する

「読み」と「書き」のちがい

- 「読み」はスピードが必要になる
- 「書き」はゆっくりでもいい
- 「書き」は、より総合的な力が必要で、子ども自身の能動的な力の影響を大きく受ける。
「書くこと」自体が嫌になっているケースが見られる
- 音韻意識の弱い子にとって、読みより書きの方が簡単な場合もある

音韻意識を育てる指導

◆キッズ学習室の実践を通して

低学年児には

遊びを通して、働きかける音韻指導

ことば遊びが、子どもの力に…

ゲーム感覚を取り入れて

子どものしんどさを受けとめる

日本語は言語的に、透明性が高く文字一音対応関係が単純明快な言語だといわれているが、音韻意識の影響は想像以上に大きいかもしれない。

高学年児童・生徒に対する音韻指導は、どうすすめるか？

ご静聴 ありがとうございました。